

看護学の基盤形成にいかす メタ統合 質的研究の蓄積と活用

日本では、2008(平成20)年4月1日現在、看護系大学が167となり、看護系大学院は修士課程が109、博士課程が46、専門職学位課程が1、日本看護系学会協議会に加入している看護系学会が34に達している。それに呼応して看護研究が大変活発な状態に至っており、質的な研究手法を用いた興味深い成果の公表も大変多くなっている。

ところで、質的な研究の成果は、数字ではなく言語を用いた表現で示される。すなわち質的研究は、数字化することができないような事象を扱うのに適しており、存在や認知、思考などの連続的で多面性のある内容を扱えるという利点がある。しかし、結果として研究者が示す言語的に表した概念が、どのようなイメージを表現する意図で用いられたのか、読者がその言語的表現からどのような内容を汲み取るかなどにおいては、大変複雑な解釈プロセスがある。そのことは研究成果のその後の活用においても、解釈上の注意深い検討を要する。したがって、そのような作業を行なって先行研究を意味づけ、その後に積み上げる形で次の研究課題を設定することよりも、手っ取り早く対象や場を変えて、一から研究を行なうケースのほうが多くみられる傾向がある。その結果、似たような研究成果が多く産出されるが、相互の関係性は明確ではないという混沌とした状況がもたらされる。

このような情勢下にあって、複数の研究成果を統合して、より有効に研究成果の活用を図ることに、日本の研究者の関心も高まっている。欧米ではすでに取り組み始めており、質的研究成果の活用に向けた二次的な分析であるメタ統合(meta-synthesis)に関する成果も公表されている。

我々は、採択された21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点」の研究を進めるにあたって、長年蓄積されてきた質的研究成果のプールから、活用できる研究成果を見つけ出して日本文化型看護学の骨格およびその内容をつくろうという計画を立てた。そして、日本ではじめてメタ統合を行なってみたわけである。ここでは、その経験を踏まえて、質的研究の成果を統合するメタ統合とはどういったものであるかという概略を解説するとともに、実際の研究例を紹介する。

看護学はたくさんの研究成果があっても、1つひとつが看護学のどの部分を明らかにしたのかわかるように体系立てられてはいない。しかし、メタ統合を繰り返すことによって、研究者たちの関心が集中しているテーマや相互の関係が解明され、看護学の体系の明示化への一助につながるのではないかと考えている。メタ統合は大変な労力を必要とするものの、学問の進歩には欠かせないと我々は考えている。これを機会に少しでも仲間が増えていくことを願っている。

(企画：石垣和子 千葉大学看護学部教授

山本則子 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授)